

ここに幸あり

2007(平成19)年10月31日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督・脚本＝オタール・イオセリアーニ／出演＝セヴラン・ブランシェ／ミシェル・ピコリ／オタール・イオセリアーニ／ミュリエル・モッテ／パスカル・ヴァンサン／リリ・ラヴィナ／ドゥニ・ランベール／ジャサント・ジャケ／ムナ・ンディヤエ／サロメ・ブディヌ・ケイゼ／アルベール・メンディ／ヤニック・カルバンティエ／マニユ・ド・ショヴィニ（ビターズ・エンド配給／2006年フランス、イタリア、ロシア映画／121分）

……失脚した大臣を主人公にしたのは現在の日本ではいかにもタイムリー（？）だが、さすが「ノンシャラン」をキーワードとした巨匠作品だけに、おしゃれで温かみがいっぱい。男の価値は何によって計れるの？ それは友人の数。この映画を観れば思わずそう答えたくなるはず。そのうえ、温かい母親の愛や、心優しく彼を見守る女たちに囲まれた主人公は、いかにも幸せそう……。『秋の庭』という原題と最近私がハマっている竹内まりやの新曲『人生の扉』の歌詞を念頭におきながら、じっくりとノンシャランぶりを楽しみたいものだ。



失脚大臣と失脚間近の大臣は必見……？

大きな期待をもって迎えられた安倍晋三内閣がわずか1年で崩壊してしまったのは、安倍総理自身の資質の問題の他、「政治とカネ」をめぐるいわゆる「身体検査」の甘さによる大臣の失脚（辞任）問題が大きかった。総理大臣が替わり、内閣が改造されると、大臣が交代するのは当然だが、任期まで務めることなく任期途中でスキャンダルなどで辞めざるをえなくなる大臣が多いのは、それだけ政治の世界が腐っているということ。したがってそんな大臣には本来敗者復活戦はありえないはずだが、日本では……？

ところで、政治の腐敗は日本のみならず、フランスでも……？ この映画の主人公ヴァンサン（セヴラン・ブランシェ）は大臣として立派に公務を処理していた。今日

もアフリカの某国との友好のために、とある場所で友情の証としてアフリカ人の大臣（アルベール・メンディ）との間で鳥と銃を交換。その次は、功労賞の授与のためにとある村の牧場へ。

こんな公務の処理だけなら楽なものだが、ある日133名の不当解雇をめぐって民衆によるデモが起こった。そして、そのきっかけとなった発言をしたヴァンサンは突然辞職させられてしまったから大変……。後任の大臣（パスカル・ヴァンサン）がやってくる中、ヴァンサンは孫の手と1枚の絵だけを抱えてあわただしく庁舎を出ていくことに。さらに官邸に戻ると、ヴァンサンの愛人（ミュリエル・モッテ）は身の回りのものを運び出してしまった後で、中はすっかりもぬけの殻。ヴァンサンはバッグをひとつ抱えて官邸を後にせざるをえないことに……。

もっとも、ヴァンサンは大臣を辞職させられただけで政治家をクビにされたわけではないから、これからいくらでも再起の道があるはずだが、さてこれからのヴァンサンの生き方は……？ 大臣を辞職させられた、あるいは辞職間近のセンセイ方にとって、この映画は必見……？

ここにも巨匠が……

ハリウッドにも日本や中国にも「巨匠」と呼ばれる監督がいるように、旧ソビエト連邦グルジア共和国にも巨匠がいる。それが、1934年グルジア共和国のトビリシで生まれ、モスクワの国立映画大学（VGIK）監督科卒業後、カンヌ、ベネチア、ベルリンの国際映画祭で数々の受賞に輝いているこの映画のオタール・イオセリアーニ監督。私は観ていないが、ベルリン国際映画祭で銀熊賞（監督賞）と国際批評家連盟賞をダブル受賞した『月曜日に乾杯！』（02年）は、日本でも大ヒットしたことは私もよく知っている。

1979年以降活動の拠点をパリに移しているとのことだが、『ここに幸あり』はまさにフランスの香りとパリに住む人々の人情味がいっぱい。ちなみにプレスシートには、『「生きていることの幸せ」をノンシャランと描く人間賛歌」とか「唯一無二のノンシャランとした作風で観客を魅了する」と表現されているが、この「ノンシャラン」という言葉はフランス語で、「無頓着でのんきなさま、なげやりなさま」を指す形容動詞。しかし、この「ノンシャラン」という言葉は日本語としても通用しそうな響きであるうえ、のんき、のんびり、無頓着という意味としての日本語としても十分通用し

そう。誰もが癒しを求める今の日本、「ノンシャラン」という言葉を広げてみればどうだろうか……？

さすがフランス男！ 愛人がいっぱい！

シラク大統領の後を継いだフランスのサルコジ大統領は美人妻（？）セシリアと離婚のやむなきに至ったようだが、その原因はひょっとしてサルコジ大統領に愛人がいたため……？

この映画を観ていると、そうであっても全然おかしくないなと思えてくるから不思議……？ もっとも、ヴァンサンの場合は前妻と離婚した後、官邸内に愛人を置いていたよう……？ この愛人はヴァンサンが失脚した後すぐに後任の大臣に乗りかえてしまったが、なぜかヴァンサンの周りにはいつも心優しき女たちが……。

その第1は、赤毛のロシア女マチルド（リリ・ラヴィナ）。彼女は、バケツ男（ヤニック・カルバンティエ）によって汚物まみれにされたヴァンサンをやさしく自分のアパートに連れていき、シャワーまで貸してくれる親切ぶり。これにはヴァンサンも大感激で、私のみるところ男女の仲に……？ 第2は、ローラースケートでパリの街を闊歩している時に転んでしまったヴァンサンを助けてくれたアフリカ人女性デルフィーヌ（ムナ・ディヤエ）。この2人はたちまちいい仲になり、マスコミの取材を受ける始末……？

第3は、マチルドの部屋の隣でピアノを弾いていた女性バルバラ（ジャサント・ジャケ）。バルバラは庁舎に勤めていた掃除婦だったが、ヴァンサンがそんなことに気付かないのは当然。ピアノの音色に聞きほれたヴァンサンがそれだけの理由でそっと窓から一輪の花をバルバラの部屋に投げ入れたのは、さすが、フランス男と思わせるおシャレな行動……？ さらに最後には、何とヴァンサンのアパートをバケツ男らとともに不法占拠していた多くのアフリカ人たちのリーダー格の太っちょお婆さんとも仲良しに……。

古い友人たちもいっぱい！

男の値打ちは何によって計れるのか……？ その1つの基準が友人の数の多さであることはまちがいない。そしてその点ヴァンサンは立派なもの。

失脚後ヴァンサンが最初に訪れたのは別れた妻の家だが、そこをケンもホロロに追

い出されたのはむしろ当然。しかし、公園のベンチで、1杯の酒と1本のタバコを介して、庭師のアルノー（オタール・イオセリアーニ）ら古い友人と交わす男同士の短い会話は実に心地よいもの。また、失脚したヴァンサンに対して「新聞を読んだが、失脚して凡人に戻ったらしいな」と話しかけたのが、昔の友人で今は司祭となっているヨハン（マニュ・ド・ショヴィニ）。ヨハンの同僚たちと共に、友達のジェジェ（ドゥニ・ランベール）の店で楽しく飲み歌うヴァンサンはホントに楽しそう。

失脚して政界から離れても、こんなすばらしい友人がたくさんいるということは、つまりヴァンサンの男の値打ちが高いということ……。

名優ミシェル・ピコリが珍しいキャラに挑戦！

プレスシートによると、巨匠オタール・イオセリアーニ監督は、アドレス帳からキャストを探すとされているように、身内や知り合いなど演技経験のない素人をキャストリングすることで知られ、これまで彼の作品に有名なスター俳優が出演したことはほとんどない、とのこと。ちなみに、この映画の主人公ヴァンサンを演じたセヴラン・ブランシェは、オタール・イオセリアーニ監督の友人で、何と映画初出演とのこと。

『ここに幸あり』には、例外的にフランスを代表する世界的名優ミシェル・ピコリが出演しているが、何と彼はヴァンサンの母親役！ 子供のように母親の元に戻ってきたヴァンサンをどこまでも温かく迎える母親の役割は、この映画では貴重なもの。そんな珍しいキャラに挑戦した名優ミシェル・ピコリの演技に注目！

さすがフランス人！ ピアノもギターも……

私の見るところ、ヴァンサンの年齢は60歳前後。その経歴は映画の中からは全くわからないが、政治家になりさらに大臣にまでなっているのだから、その道でかなり努力してきたはず。日本の政治家にも音楽などの芸術に相当長けた人もいるが、それはごく一部だけの例外……？

しかし、さすが（クラシック）音楽を何百年も愛し続けてきたヨーロッパの国々、その中でも特に文化的素養の高いフランスの政治家は違うよう……？ まず私が驚いたのは、仲間たちと飲み歌っているヴァンサンが「ギターを取ってくれ」と言い、サウスポースタイルでギターを鳴らしながら合唱のリードをとったこと。さらに驚いた



ことに、昔のアパートに入り込んだヴァンサンが隠し部屋においてあるピアノの前に座り、両手でそれなりの曲をそれなりに弾き始めたこと。そのうねバルバラがピアノを弾く時、その傍に座ったヴァンサンが楽譜を見ながらギターで合奏まで始めたこと。さすが芸術の国、さすがフランス人と感心することしきり……。

弁護士の視点 その1——フランスにみる都市・住宅問題

ここで弁護士の視点を少し披露しておこう。その第1は、フランスの都市・住宅問題。つまり、ヴァンサンが官邸に入っていた間にヴァンサンが住んでいたアパートにたくさんのアフリカ人たちが入り込み、不法占拠していること。法治国家フランスでこんなことが堂々とまかり通っているのを観てビックリ。また、母親からカギを受けとったヴァンサンが部屋の中に入っていくと、不法占拠者たちの代表格である太っちょおばさんが、「警察でも機動隊でも呼ぶがいいさ。追い出せないからね！」と自信満々に宣言したことにもビックリ！ こりゃ一体ナニ……？

こうなると日本では、裁判を提起して「明渡しを命ずる」判決を得て、あるいは断行の仮処分によって明渡しの仮処分命令を得て、強制執行手続をとらざるをえない。

しかしそうすると、かなりの時間がかかることを覚悟しなければならないが、さてフランスでは……？

この問題についてのヴァンサンの行動とフランス政府の対応（？）には多少疑問があるが、まあこれもフランス流……？

弁護士の視点 その2 —— フランスにみる外国人問題

日本ではまだ外国人の大量流入という問題は発生していないが、フランスやドイツなどヨーロッパの先進諸国はアフリカなどからの移民が大量に押し寄せているため、そんな外国人にどう対応するかは深刻な問題。もちろん、彼らにフランス国民と同じ選挙権、被選挙権はないが、彼らの雇用の確保をはじめ住宅、医療問題や犯罪防止対策等々はフランス政府にとって大変な課題。

パリの街の中も、フランス人たちが住む地区とアフリカからの移民たちが住む地区がはっきりと区別され、外国人に対する差別が明確に存在していることをこの映画を観て再認識。どこかの国のノー天気な主張のように、「すべての人々を平等に！」とか「格差の是正を！」などとキレイ事ばかり言っても何の解決にもならないのは当然。しかし、そうかといってこのままでは……？ さて、サルコジ大統領はこんな外国人問題についてどんな対策を……？

邦題と原題、どちらが好き……？

『ここに幸あり』と聞けば、「嵐も吹けば 雨も降る 女の道よ なぜ険し……」と歌われる大津美子の名曲を思い出す人も多いはず……？ 少なくとも今から30年前、カラオケが今ほど普及せず、飲み屋ではギターの弾き語りで歌っていた頃、私はこの曲を何度も歌ったことがある。この曲の歌詞はこの映画には全然似合わないが、映画全体の雰囲気をみれば、『ここに幸あり』という邦題はそれなりに工夫されたもの……？ それに対して、この映画の原題は『JARDINS EN AUTOMNE (秋の庭)』とのことだが、さてそのココロは……？

去る10月29日、私は千葉県で開催された第21回「愛声会」ゴルフコンペに出席した。これは、元NHKアナウンサーで1987年に全米スポーツキャスター協会賞の特別賞を日本のスポーツアナウンサーとしてはじめて受賞し世界殿堂入りした羽佐間正雄氏が年に1度開催しているコンペで、今回は各界の著名人約170名が参加した。そして、

コンペ終了後の懇親会で私は昨年に続いてフルバンドをバックに1曲歌うという榮譽に浴したが、ここで熱唱(?)したのは竹内まりやの新曲『人生の扉』。この曲は、50歳になった竹内まりやが、1番で20代から50代を振り返り、2番で60代から90代を展望し、そしてサビの部分で「弱っていくことは悲しい、年老いていくことは厳しい、そこでみんなは人生なんて意味がないよと言う。しかし、私は信じている。生きていくことはそれだけで価値があるのだということを……」と歌ったすばらしい曲。

この歌詞では年代ごとにストレートにその特徴を歌い込んでいるが、この映画の原題『秋の庭』は季節によって人生を区切ったもの。つまり、「人生の秋」になってやっと人間らしく生き直すことができるという思いを込めたものだ。さあ、そんな邦題と原題、あなたはどちらが好き……？

女たちが集まった大団円は圧巻！

今の日本は何かと言うと「格差、格差」と叫ばれ、弱者保護の政策を立てることのみに目を奪われているが、この映画がすばらしいのは、大臣を失脚させられたヴァンサンが決して自分を敗北者だと思わず、自分が置かれた状況に応じて人生を前向きに生きていこうとしていること。一時は、ぐでぐでんに酔っぱらったヴァンサンが、アパートを追い出されたアフリカ人たちが住んでいる(?)橋の下で、彼らと一緒に酒とタバコを飲んで楽しんだり……？

そんなヴァンサンの生き方は、この映画に登場するヴァンサンの周りの男たちも、女たちもみんな同じ。ただ1人の例外はヴァンサンの後任大臣かもしれないが、その大臣もデモが続く中ついに失脚。そんな彼が、今は庭師となって働いているヴァンサンのところに現れた。彼に酒とタバコをすすめながら交わされる会話がまたおシャレ。つまり、「うらんでるか？」との質問に対してヴァンサンは「まさか、その逆だよ」と答えたから、実にかっこいい……。

そして映画はいつしかフィナーレへ。その舞台はヴァンサンの実家。そこに集まるのはママを中心とし、バルバラ、ヴァンサンの元妻、そして元愛人、マチルド……の女たちだ。彼女たちが、大きなテーブルを囲んで話す話のネタはきっとヴァンサン。こんな女たちが集まる大団円のスターになれる失脚大臣のヴァンサンって、ホントにステキ……。

2007(平成19)年11月1日記